

フランス語の思考動詞の補足節における直説法と接続法の叙法選択に対して、談話の与える影響

本発表の目的は、*Pourquoi crois/penses-tu que P ?*のPにおける直説法と接続法の叙法選択をもとに、フランス語の思考動詞の補足節における直説法と接続法の叙法選択に対して談話の与える影響を考察することにある。フランス語の直説法と接続法の叙法選択に関しては、Huot (1986) や Soutet (2000) が「引き受け (prise en charge)」の観点から説明をしている。こうした分析が正しいとすれば、*Pourquoi crois/penses-tu que P ?*において、(2) のように文主語 *tu* が補足節の内容を引き受けている場合は、補足節においては直説法のみが用いられるべきである。一方、(3) のように *p* が前提となっており、引き受けが行われていない場合は、補足節においては接続法が用いられると考えられる。

- (1) *Pourquoi crois/penses-tu que P ?* → (2) と (3) の両方の解釈が可能
- (2) *Pourquoi as-tu cette opinion ?* (どうして君はそんな意見を持つのか?)
- (3) *Selon toi, pourquoi P ?* (君によれば、どうしてPなのか?)

しかし、井上 (2021) にあるように、Frantext と ESLO からは (3) のように *Selon toi, pourquoi P ?* の意味を持つにも関わらず、直説法が用いられている例が多数見つかっている。これらの用例は、P の内容を対話者が意識していないと話者が判断したために、前提であるため本来は接続法が用いられるはずの補足節において、P を新情報として提示するために直説法が用いられたと井上 (2021) は判断している。もっとも、本来は真偽判断と関連しているはずの直説法と接続法が、どのようにして情報構造と関連を持つのかに関しては、井上 (2021) において明確に説明されていなかった。本稿では、*it-cleft* 文における前提の特性を扱った Delin (1992) の分析を当てはめることで、*Pourquoi crois/penses-tu que P ?* における叙法判断が、主張と前提の持つ談話的な性質から来ていることを明らかにする。

[参考文献]

- Huot, H el ene. 1986. "Le subjonctif dans les compl etives : subjectivit e et modalisation." In *La grammaire modulaire*. Eds by Mitsou Ronat & Daniel Couquaux. Paris: Minit, 81-111.
- Soutet, Olivier. 2000. *Le subjonctif en fran ais*. Paris: Ophrys.

井上大輔. 2021. 「Pourquoi crois/penses-tu que P ?の従属節における直説法と接続法の叙法選択と、引き受けの有効性の再検討、およびそれ以外の要因が与える影響」 『SOPHIA LINGUISTICA』, 70: 55-73.